

小林久三

教師殺人ミステリー

蝶たちの殺意

KODANSHA NOVELS

講談社

ベルス



蝶たちの殺意

昭和五七年二月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六八〇円

著者—小林久三 ©1982 KYUZO KOBAYASI Printed in Japan

発行者—三木章



発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二二—二 郵便番号一一二 電話東京(〇三)—九四五—一一一(大代表)
振替東京八—三九三〇

印刷所—株式会社廣済堂 製本所—大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

僕たちの殺意

竹久三

ODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

ブックデザイン 市川英夫
カバーイラストレーション 小松久子
本文イラストレーション 小松久子

目次

第一章	旅の終りに	7
第二章	黄色い異邦人	39
第三章	蜜の罠	71
第四章	あばかれた動機	109
第五章	歪んだ傾斜	141
第六章	死者からの手紙	173
第七章	凍った蝶	205
第八章	殺意の複合	237
第九章	灰色の神話	270
第十章	旅のはじめに	302

第一章 旅の終りに

1

電車が、新宿駅に滑りこんだ。

バッグを手に、ホームに降りたとき、小山節子は首筋を軽く叩いて、背筋をのばした。いつもそうなのだが、新宿に着くと、なぜかほっとした気分になる。

実際には、自宅に着くまで、新宿から小田急線の急行に三十分ほど、乗らなければならぬ。にもかかわらず、自宅が、すぐ目の前にあるような気がする。もう五年以上も、小田急線沿線に住んでいるせいだろうか。

階段を降りて、小田急線の改札口のほうに向かった。

「たった一日だけど、いい骨休めになったわね」

脇を歩く山崎一枝が声をかけた。「温泉にのんびりつかったなんて、結婚してからはじめてよ」

「わたしもそうよ」

と、応じて、節子は温泉どころか、旅行に出たのは何年ぶりだろうかと考えた。横浜の団地から、百合丘に引越して五年になるが、それ以来、一度も旅行していない。住宅ローンの支払いに追われて、焼津への里帰りもままならないのだ。

「女って損ね。うちの旦那なんか、出張のたびに観光地かどこかに泊ってくるのよ。来年から、ジャンジャン女だけの旅行をしましうよ」

と、一枝が金管楽器のように張りのある声でいった。耳が少し遠いせいか、いつも一オクターブ高い声をだす彼女だが、久しぶりの旅行で興奮した余韻がのこっているのか、その声には、心地よい弾みのようなものが含まれている。

「そうね、来年の三月が終ってしまえば——」

「息子さんの高校受験ね」

「そうなの」

「大変ね。公立？ それとも私立なの」

「わからないわよ、まだ」

「大丈夫よ。あんたの息子さんなら」

「そうだといいいんだけど」

「その点、うちなんか気楽なもんよ。来年、長男が高校を出るんだけど、大学へいく気なんか、これっぽっちもないんだから。ホテル関係の仕事をしたって、ボーイの養成所みたいところに進みたいんですって」

「いい話ね」

「うまくいくかどうか知らないけど、これで肩の荷がひとつおちることは、確かだわ。再来年には、娘のほうも高校を卒業するし、そうになったら、こっちも子育てから解放されて、自分の人生をたのしまなくちゃ。もりもり遊ぶつもりよ」

一枝は片目をつぶってウインクすると、土産物の入った紙袋を肩にかついだ。

「うらやましいわ」

節子は、ふっと溜息をついて、目を伏せた。来春の高校受験をひかえた息子の明のことが、悪性の腫瘍のように胸の奥に巣喰っていてはなれない。旅行中も、絶えず明のことが気になっていた。いま頃、ちゃんと勉強しているだろうか。妹の桂子は、夜食を兄のところに運んだだろうか。風呂は？ 弁当の仕度は？

その点、陽気で楽天的な一枝が、つくづくうらやましいとおもう。自分は自分、子どもは子どもと、すっぱり割り切って、子どもに人生の選択をまかせような大胆さやおもいきりのよさは、どこをどう探しても、自分のなかにはない。

〈明は、どうしているかしら〉

節子は、ちらと腕時計に目を落した。午後八時三十二分。

列車の事故で、帰りが予定より一時間半近く遅れていくけれど、桂子が母親がわりに夕食の支度はしてくれたはずだ。万一の場合を考えて、今夜の献立でまで、桂子に指示してある。

〈明は多分、勉強中だわ〉

夫の省一もすでに帰宅して、桂子と一緒に居間でテレビをみているにちがいないと、節子は頭のなかに、自宅の様子をおもい描いた。

早く帰らなければというおもいが、つのった。足を早めた。

小田急線の改札口を通った。

急行と準急は、二階のホームから出ている。

階段を昇ろうとして、節子は、地下ホールの奥の壁際にならんだ赤電話に目を留めた。

足がとまった。

自宅に電話を入れておこうと考えたのだ。

「ちょっと待って」

と、節子は一枝にいった。

「電話するの？」

「帰りの時間をしらせておこうとおもって」

「そんなにご主人のことが心配なの。大丈夫よ、ちゃんと留守を守っていてくれるから」

「そんなんじゃないわよ」

「わかった。ホームで待ってるわ」

一枝は、そういい残すと、階段をあがっていった。

節子は赤電話のところまで小走りに走りよると、自宅ヘダイヤルをまわした。

電話は、すぐにつながった。

「小山ですが」

受話器の奥から、男の声がきこえた。夫の省一の声だった。

「わたし……いま、新宿」

「ああ、お前か」

「九時十五分には帰るわ」

「わかった」

「明は？ 自分の部屋？」

「うむ」

あいまいな返事が返ってきた。

「どうしたの？」

「まだ帰っていないんだ」

「学校から？」

「ああ」

「帰っていないって、あなた、もう八時半を過ぎているのよ」

声が尻あがりの調子になった。

返事はなかった。

「どこへいったの、明は」

「わからん」

「電話もないの？」

「ああ」

「そんな無責任な……」

「心配ないさ。多分、友達の家にも寄っているんだろ」

う」

「山内さんとか升本さんの家に連絡してみたの」

節子は、明の友人の名前をあげた。

「いや、まだだ」

「冗談じゃないわ。受験まで、あと四ヵ月しかないのよ」

「そのうち帰ってくるさ」

と、省一はとってつけたようなことをいった。

その声に、パトカーのサイレンの音がまじってきこえてきたような気がした。

「なにか事件でもあったの、家の近くで？」

「いや」

省一は、即座に否定したが、ややあって、

「中学の先生が二人、殺されたらしい」

2

「先生が殺されたって……いつ？」

「今夜だ」

「犯人は、つかまったの」

と、きき返しながら、節子は電話の硬貨投入口に、新たに十円玉を差し込んだ。

ホームに待たせた一枝のことが気になる。あまり長話できない。焦りに似たものが、胸に湧いた。

「まだらしい。さっきから、パトカーが走りまわっている」

「殺されたのは、どこの中学の先生なの」

北百合丘中だと、省一が答えた。明が通っている中学だった。

「それで？」

節子は、おもわず声を張りあげていた。

「近所のひとの話では……」

なにかいいかけて、省一は、いい激んだ。

その沈黙に、節子は、いいようのない不安と苛だちを覚えた。

頭のなかで、濃い灰色の霞が渦巻きはじめた。ちらと深い亀裂がみえ、その裂けめから明の顔がのぞく。

「どうしたの」

沈黙に耐えきれずに、彼女は声をあげた。

「なんでもない。早く帰ってこい」

「近所のひとは、どういつているの」

「いいから、早く帰るんだ。桂子も待っている」

「明がどうかしたの」

「犯人は、茶色のシャツに黒のズボンをはいた小柄な男らしい」

「茶色のシャツ？……」

節子はかすかに眉をひそめた。予想外の言葉だった。茶色のシャツに黒のズボン。そして小柄な男。

頭の隅を、光のような速さで明のイメージが、かすめ過ぎた。あとに、痺れのようなものが残った。

いま夫が口にした犯人の特徴と明との間には、粗い相似があった。

「とにかく早く帰ってこい。駅までむかえにいくのか」

「大丈夫よ、むかえにこなくても」

かすれた声でいったあと、節子は、

「明は、ほんとうに家に帰ってないのね」

と、すがるような調子でいった。

「もどってない」

「そう。とにかく早く帰るわ」

うなずくと、節子は受話器をフックにもどした。

つかのま、赤電話の前に立ちつくした。すくんだように立ちつくしたまま、夫の最後の言葉の突き刺すような響きにきき入っていた。明は家にいない。学校から帰っていない。やがて、彼女は赤電話の前を離れた。

階段を昇った。

二階のホームには、急行を待つ乗客が列をつくっている。

一枚の姿を探した。

だが、なかなかみつからなかった。

乗客の列を目で追いながら、節子は頭の奥で別なものをみていた。茶色のシャツを着た、明の顔だった。

へまさかへ

と、彼女は口のなかで呟いた。昨日の朝、旅行に出かけるときに、明の着換え用に茶色のシャツを彼の部屋においてきたのだ。明日、つまり今日、このシャツを着ていくのよ、という言葉を添えて。

なにかのまちがいだわ、と、くり返し自分にいいきかせた。息子が、自分の中学の教師を二人も殺すようなことをするわけがないではないか。

家に帰っていないことは、偶然の一致にすぎない。ま

して、茶色のシャツに黒のズボンをはいた小柄な男に、息子が似ているというのも、単なる偶然だとしかしいようがない。

息子は、優しい性格なのだ。親おもいでもある。学校でも、家庭でも、一度も問題を起したこともない。成績も、クラスでトップクラスなのだ。

へ息子が、犯人であるわけがないじゃないの」
なにを血迷っているの、あなたはと、節子は自分で自分を叱りつけた。息子は、おそらく友達の家で、一緒に受験勉強をしているにちがいない。そうに決まっている。

「小山さん、なにぼんやりしているの」
不意に、背後から肩に手をおかれた。

一枝の声で、節子は現実引きもどされた。

「ここに、一緒に並んで」

「すみません」

節子は、一枝の脇に立った。

「どうしたのよ。夢遊病者のような顔をして。なにかあったの」

「べつに……」

「ご主人が、まだ帰っていないんじゃないの。あんたが家をあけたのを、これ幸いとばかりに浮気でもしてるんじゃないかと、心配してるんじゃないの、どう、図星でしょう？」

「そんな甲斐性なんかいいわよ、主人には」

節子は、無理に一枝にはほえみかけようとしたが、いまの彼女にとってそれも苦痛で、弱々しい笑みはすぐに消え去った。

「でも、こんな時間になっても、ずいぶん混むのね。座っていけそうもないわ」

と、一枝は話題を変えた。

それが、節子にはありがたかった。同時に、一枝のおしゃべりに合槌を打っていれば、気分がまぎれる。少なくとも、さつき電話で耳にした二人の教師殺害事件のことを考えずにすむ。

電車がホームに入ってきた。小田原行きの急行だった。

車内は、たちまち満員になった。

二人は、隅で吊革をにぎった。

「これで旅も終りね。明日からまた、ばりばり働かない

と」

一枝が、冗談めかしていった。

「そうね」

車窓にぼんやり映る一枝の顔に向かって、節子はうなずいてみせた。

電車が走り出した。

車輪の音が、車内に充満した。一枝がなにかしゃべりかけているのだが、よくききとれない。一枝も、いつかおしゃべりをやめた。

節子は、再び、自分の想念のなかに沈んだ。

へよりによって、わたしが留守にした晩に、事件が起るなんて」

やはり旅行に参加すべきではなかったという悔いが、胸を刺した。

鬼怒川温泉への一泊旅行は、スーパーの「南十字屋」多摩店につとめる十四人のパートタイマーが集って企画されたものだった。パートタイマーの女性の親睦をはかるために、去年の秋から月千円ずつを積み立て、昨日の十月十四日の水曜日、スーパーの休みを利用して出かけた。鬼怒川温泉に一泊し、現地解散して、ばらばらに帰

る。節子は、気の合う一枝と一緒に鬼怒川から日光に出て、東照宮に参詣し、中禅寺周辺の紅葉をたのしんだ。結婚して以来、はじめて家事から自由になったのが、そのわりには、解放感に浸り切れなかった。昨日の朝、家を出るときに、明がひどく暗い顔つきをしていたことが、胸に重石のように沈んで、心の弾みを失わせたのだった。

3

車窓には、ぼんやり明の顔がかかっている。吊皮をにぎりながら、節子は、その顔をみつめていた。

昨日の朝、明は、旅行支度を整えた節子を、ちらと横目で眺めて、こういったのだ。

「やっぱり旅行にいくのか」

その言葉が、気になっている。そのときは、あつさり受けとめて、あら、ママがいないと淋しいの、とまぜ返したが、いま考えてみると、明はなにか相談したいことがあり、旅行にいったほしくなかったのではないか。

〈明〉

と、節子は、車窓に映る息子の顔に向かって問いかけた。

「あなた、まさかとんでもないことを……」

明は、なにも答えようとしないう。歪んだ顔で、じつとこちらをみつめているようにみえる。

今夜、明の中学の先生が二人も殺されたという。殺された先生の名前はわからない。

被害者は、明の担任の先生ではないだろう。かりにそうだとすると、明が先生を殺すような、大それたことをするはずがない。

万にひとつもあり得ないが、明が今夜、家に帰っていないというのが、気がかりだ。そのうえ、犯人が、茶色のシャツを着ていたらしいというのも、引っかかる。

「へよりによって、わたしが一晚、家をあけた日に……」

節子は、不意に、のどの奥に搔痒感のようなものを感じた。

一分でも早く家に帰りたい。家に帰り、明の姿をみて、息子が事件と無関係であることを確かめたい。

電車の進行速度が、ひどく遅いようにおもえた。新百

合ヶ丘まで、五つも停車するのもどかしい。できることなら、途中で停車せずに、ノン・ストップで新百合ヶ丘まで突っ走ってほしい。

「なにも考えまいとした。」

なにかを考えはじめようとすれば、明のことにおもいが傾き、ある想像が、不安の闇のなかで、しだいに凝固していくだけだ。

「ぼんやり車窓をみつめた。」

車窓には、依然として、明の顔が貼りついている。心なしか、その目は、なにかを必死に訴えているかのように映る。

まばたきして、明の顔を追い払おうとした。だが、駄目だった。車窓に浮かぶ明の顔は、少しずつ拡大して、車窓いっぱいひろがっていく。

「……………」

節子は声にならない呻きを洩らした。

「どうかしたの」

「一枝が声をかけた。」

「なんでもないわ」

と、節子は首をふってみせた。

「あつという間に、旅行が終わってしまったわね。楽しみにしていることなんて、まばたきするぐらいの速さで、通り過ぎちゃうくせに、いやなことって、うんざりするくらい長つづきするものよ」

屈託のない一枝の言葉に、また、なにか不安めいたものが湧いた。留守中に最悪なことが起った暗示のようだった。

「疲れたの」

「そうね」

「あんたって、家庭第一主義なのね。明日、息子さんにもたせる弁当のおかずのことなんか、考えているんじゃないの」

「冗談じゃないわ」

「そんなこといってもだめ。顔にちゃんとかいてあるわよ。たまに家をあけても、子どものことばかり気になるんだから」

いつもは、ストレス解消剤になる一枝のおしゃべりが、いまの節子には、ひどくわずらわしくおもえた。一オクターブ高い、一枝の声が金属質の響きをとまなつて、頭の奥にがんがん反響してくる。

気がのらない返事に、一枝は沈黙した。

電車は、多摩川の鉄橋を渡った。

鉄橋を渡り切ると、川崎に入る。

車窓の向うに、巨大な怪獣が寝そべったような丘陵が、黒々とみえてくる。その一面に、節子の家はあるのだった。

へあと十分足らず……

口のなかで、呟いた。

家に近づいたせい、か、安堵感が胸に落ちた。明に対する不安が、嘘のように消えた。明は、わたしが留守にしたことをいいことに、学校の帰りに、友人の家に寄っているにちがいない。長男にありがちなおんききで、自宅に連絡もせずに、一時の解放感にひたっているのだろう。

明が、殺人事件をひき起したという不安に縛られたなんて、わたしも、どうかしていると、節子はおもった。旅の疲れからくる、一種の妄想に近いものだといえるかもしれない。おとなしく、内向的な息子が、こともあるうに先生を二人も殺すような、途方もない事件を引き起すわけがないではないか。